

ジャガイモと映画 (26)

<マッシュポテト (3)>

Web ジャガイモ博物館館長 あさま 浅間 かず お 和夫

90. 『大どろぼう ホッツェンプロッツ』

(原題：Der Rauber Hotzenplotz)

1974年、西ドイツ映画。監督：グスタフ・エームック。

ドイツの作家オトフリート・プロイスラーによる児童文学作品シリーズを映画化したもの。ドイツの田舎町を舞台とする大泥棒ホッツェンプロッツと彼を捕まえようとする2人の少年のアクション物語である。

おばあさんの大切なコーヒーひき器が、大泥棒ホッツェンプロッツに盗まれてしまう。魔法使いツワッケルマンや妖精も登場して、そのコーヒーミル奪還のため、頭の良いカスパールと純粋なゼッペルの大活躍がはじまる・・・

タイトルのホッツェンプロッツ（声：ハナ肇）がこの物語の主人公である。つばの広い帽子を被り、モジャモジャの黒髭と凄いかぎ鼻が特徴の大男で、少し太っているが動きは機敏。腰に締めた幅広の革ベルトに拳銃と7本の短刀を差し、料理の腕は良い。好物は嗅ぎ煙草と茸スープである。性格は大胆にして狡猾、冷酷で欲深く、欲しい物は力づくで奪う悪党。加えて、“大泥棒”なのだが、窃盗、強盗、誘拐までもやってしまう。

彼の友人にペトロジリウス・ツワッケル



写真1 ホッツェンプロッツ

マンという森の奥深くに住む魔法使いがいる。ツワッケルマンは大食漢でジャガイモが好物であり、洗濯釜いっぱいのマッシュポテトを一度に平らげてしまうほどである。彼はいろいろな魔法を使いこなすが、何故か、魔法でジャガイモの皮を剥くことだけはできないため、その作業に従事できる召使を欲しがっている。そして、捕まえた子供にやらせている。ジャガイモの皮剥き作業は単調だけでなく、面倒臭いのであろうか。薄く剥くと、窪んだ目にある土

やアルカロイドを含む緑の表皮部分が残ったり、厚く剥くと廃棄率が高まる。そのため集中力が必要であり、手抜きすればすぐ判る、地味で辛い作業なのである。

妖精も登場して、ホツェンプロッツと少年たちの知恵比べがテンポよく、ユーモア入りで展開されていく。

91. 『モネ・ゲーム』

(原題：Gambit)

2012年、アメリカ・イギリス映画。監督：マイケル・ホフマン。

イギリス人の美術学芸員ハリー・ディーン（コリン・ファース）は、長年メディア王ライオネル・シャバンダー（アラン・リックマン）のもとで働いていたが、彼の横柄さと人使いの荒さには我慢できないものを感じていた。億万長者シャバンダー（アラン・リックマン）が印象派クロード・モネの連作『積みわら』の『積みわら・夜明け』を落札して以来、対になる作品で戦時中ナチスに強奪された『積みわら・夕暮れ』を探し求めている。これを知っていたハリーは、知人の退役軍人ネルソン少佐が描いた贋作の『積みわら・夕暮れ』を利用して大金を巻き上げることを計画する。

ハリーは、超天然のPJ・プズナウスキー（キャメロン・ディアス）を仲間に加え、がんさく贋作で大金を手に入ろうと考える。しかし悪知恵は働くものの大胆さには欠けるハリーの計画は、当初から、PJが次々とトラブルを起こし、シャバンダーの雇った鑑定士が登場してくるなど、完璧だったはずの計画は二転三転してしまい、事態は思わぬ方向へと転がっていくと言う犯罪コメディである。

原題の英語のgambit（ギャンビット）とは、イタリア語の足が語源であり、“手始め、切り出し”の意味がある。チェス用語では、小駒を犠牲にして便利な態勢を導くための初手を言う。

モネの『積みわら』は収穫後の畑に積まれた干し草の山を描いた一連の絵画の総称であるが、2022年10月23日ドイツ北東部のポツダムにあるバルベリーニ美術館に展示されているもの（写真はClaude Monet - Meulesの1890年作品。油絵、高さ：72.7 cm；幅：92.6 cm）に『マッシュポテト』がぶちまけられ、大騒ぎになった。



写真2 マッシュポテトをかけられたモネの『積みわら』

実行犯は環境保護団体「Last Generation」(Z世代)の少女であり、「化石燃料を使うという道が、われわれ全員を死に至らしめることを社会に記憶させるためだ、絵画を保護することは地球を守ることよりも大切なのか」と問いかけたそうであるが、このようなエコテロリズム行動は本当に意味があるのか、誰かが大切にしているものを踏みにじることは、許してはならない、との声が多い。幸い、絵画はガラスで保護されていたため、損傷はなかったが、マッシュポテトをかけた男は器物破損など

の容疑で捕まった。

10月14日にも、イギリスの環境活動家団体「Just Stop Oil」のメンバーがイギリスの美術館ナショナルギャラリーに展示されていたゴッホの『ひまわり』にトマトスープをかけ、24日にも4人が“ろう人形館マダム・タッソー”でチャールズ国王のろう人形の顔にチョコレートケーキを投げつけて逮捕されている。続く27日にはオランダのハーグにあるマウリッツハイス美術館のフェルメールの代表作『真珠の耳飾りの少女』を覆うガラスに液体がけられた。

92. 『笑わない女』

1996年、テレビドラマ。脚本：三谷幸喜。

『警部補・古畑任三郎』シリーズのひとつである。ゲストは沢口靖子。軽いバラエティものではなく、表情は固めでいいため、適役と言えよう。ブライオリ女子学院の生活科主任教師宇佐美ヨリエ（沢口靖子）は戒律を基に定めた厳しい校則を律儀に守っているが、ある日口紅を塗ってみる。その後、同僚の阿部哲也に授業で使う本を貸してほしいと頼み込み、背を向けたところを鉄パイプで殴り倒し、ダンベルで後頭部を打ち、殺害する。阿部は倒れる直前に宇佐美が着ていたガウンのボタンをむしり取っていた。椅子から足を滑らせた事故として捜査が始まるが警部補古畑任三郎（田村正和）と今泉慎太郎（西村雅彦）は被害者の手は傷だらけで、犯人の物と思われるボタンを握りしめていたままだったことに疑問を感じる。

全寮制の空き部屋のひとつを借りて、泊まり込みの捜査をする古畑と今泉は、校長から寮の食事に招待される。しかし、その食事は『動物の肉は口にしてはならない』という戒律からすべてベジタブル。しかも、おかずはマッシュポテトのみであった（写真）。御覧の通り、その量は山盛りであり、カラーは3種類あった。すなわち、

- ①マッシュポテトにニンジン混ぜた「赤マッシュ」
- ②マッシュポテトにグリーンピース混ぜた「緑マッシュ」
- ③マッシュポテト+ジャガイモの「白マッシュ」



写真3 おかずは、3種のマッシュポテトのみ

味は皆似ているため、女生徒はみな隠れて塩をふっているが、今泉だけが「これ美味しい～、美味しい～」と言いつつ食べる。

戒律が非常に厳しい全寮制のミッションスクールで、その校則を厳格に守る宇佐美ヨリエの演ずるアリバイやトリックを、巧みな話術と卓越した推理力で崩していき、完璧と思われていた犯行の真相を解明していき、最後に自供に追い込む。